

平成28年度 第2回木曾生物群集保護林復元部会の概要

開催日及び場所	平成29年3月1日(水) 13:20~15:30 林野庁中部森林管理局 大会議室
出席委員	大住克博(鳥取大学農学部附属 フィールドサイエンスセンター 教授) 岡野哲郎(信州大学農学部 教授) 部会長 正木隆(国立研究開発法人 森林総合研究所 森林植生研究領域 領域長) 横山隆一(公益財団法人 日本自然保護協会 参事) 山本進一(岡山大学 理事・副学長) オブザーバー 委員7名中5名出席 五十音別 敬称略
議題	1 木曾生物群集保護林における復元計画(案)について 2 その他
概要	<p>○ 委員からの主な意見等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標林型の「地形等によっては部分的に多様な樹種が大部分を占める森林」とは、どのくらいの規模感(微地形、小班単位など)を考えているのか。 ・温帯性針葉樹が広葉樹と混交している森林と多様な樹種が大部分を占める森林を「その他の森林」の2区分としたらどうか。また、「数百年後には」の記述は不要ではないか。 ・目標林型として、樹高50mのヒノキ上木と、樹高25mの広葉樹が下層にある森林も想定されうる。 ・誰も見たことがない森林へ復元しようとしているので、順応的に対応していくしかない。 →「目標とする林型」の記述振りは、座長と相談の後、メールにて各委員の意見を聴き整理したい。 ・復元の取組を高標高地域から始めるなど、戦略的にエリア分けをして取組をするとよい。 →当面は間伐等の通常の森林施業が必要な箇所から実施せざるをえず、エリア分けをして実施することは難しい。 ・「カラマツ人工林の更新は、より慎重な取扱いを検討する」との記述では、何をするのが分からない。 ・説明調に記述できないのか。 →カラマツ人工林の取扱いについて検討すべきことが多いことから、このような記述振りとしていた。わかり易い記述振りについて、座長と相談の後、メールにて各委員の意見を聴き整理したい。 ・天然更新がうまくできないことも想定し、人工林を残して擬似的な天然林とすることでもよいのではないか。 →天然更新が完了しなければ、全ての植栽木の伐採は行わない考えである。 ・列状間伐は、若齢林分ではよいが、高齢林分には適していないと考える。列状間伐の実施時期や実施場所を慎重に考えてもらいたい。 ・超長伐期施業における間伐方法を検討していく必要がある。 ・モニタリング調査は、現地に応じて柔軟に実施してもらいたい。 ・モニタリング調査に当たって地上レーザ計測は有効であり、ぜひ活用されたい。 ・国民に向けてファンディングをしていくことを考えてもらいたい。 ・試験地の取扱については、各委員とともに現地検討のうえ、試験地としてどのように活用していくのか検討していきたい。 ・長野県飯田市にある遠山埋没林は、温帯性針葉樹林の姿を知る手がかりとなるので、現地検討会の視察箇所として検討されたい。 ・メールでの意見交換等に当たっては、委員全員が意見交換等の様子を共有できる方法で行ってもらいたい。 ・「木曾悠久の森」の取組について、外部発信を強化してもらいたい ・専門家向けに「木曾悠久の森」の核心地域の見学会を行ってもらいたい。 ・「木曾悠久の森」内での作業について、例えば市民団体と共催して、一般国民とともに実施することを検討してもらいたい。 →写真コンテスト、ワークショップの実施、英語版パンフレットの作成などについて検討したい。

※本会議は、平成28年度第3回木曾悠久の森管理委員会植生管理専門部会を兼ね開催された。